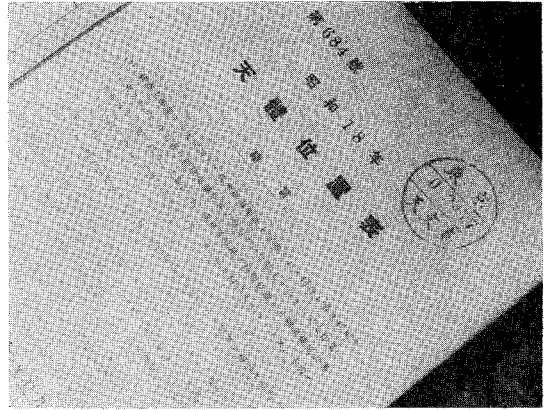


◇ 3月の天文暦 ◇

日 時	記 事
5 4	月 最 遠
20	啓 蟄 (太陽黄経 345°)
8 16	下 弦
14 19	水 星 東方最大離角
15 21	朔
17 6	月 最 近
20 21	春 分 (太陽黄経 0°)
21 20	水 星 留
22 11	上 弦
30 5	望
31 21	水 星 内 合



言いたい放題・言いたい放題・言いたい放題

歴 史 の 空 白

最近私は、「文化評論」という雑誌の6月号に、東北大学の竹内峯氏が、「日本の天文学と天文学者—その歴史と課題」という題で書かれた小論を興味深く読んだ。この中で竹内氏は明治以後の日本の天文学の発展の跡をたどると共に、寺尾寿先生以後の日本の天文学者について、氏独特の批評眼をもって位置づけをされており、大いに傾聴に値すると思った。

しかし、これを読んで一つだけ気になることは、この小論では昭和十年から二十年までの十年間については、記述がいちじるしく簡略となっていることである。たとえば、この時代に東京天文台長をつとめられた関口鯉吉先生（ことわっておくが、私は同先生とはまったく姻戚関係はない）には、一言もふれていない。この時代は戦争中の時代であって、研究条件の悪化、印刷出版の困難があり、これに加えて東京天文台の火災もあって、資料がきわめて少ない時代なのである。この事情は、「東京天文台75周年誌」、「同90周年誌」の上にも反映されて

いて、この10年間は歴史の空白状態の時代といえる。

しかしながら、この時代は決して何もなかった時代ではなかった。まず何よりも、この時代は新進の研究者が国内の多数の研究機関に配置された時代であり、その成果は、たとえば水路部の「天体位置表」の発刊（昭和17年）としてあらわれているのである。

現在、日本の天文学界に長老格として活躍されている諸先生は、この時代にうら若き新進として、その研究生生活のスタートを切られた方々である。人生において、もっとも多情多感なりし青春期を、この激動の時代にすごされた諸先輩は、この時代の風潮から何を学ばれたのであろうか。私自身について言えば、私はこれらの方々より十年おくれて、昭和二十年から三十年の間に、スタートを切った人間であり、この戦後まもない時代の中から多くのものを学んだつもりである。しかし戦争の終わった昭和二十年というのは、非常な歴史の断絶の時点であり、私の見たより十年前の時代は、まるで神代の時代であって、一切が深い神秘に閉ざされているように見える。

私はこれら諸先輩の御協力によって、この歴史の空白がいつかは埋められることを切望するものである。

(東京天文台 関口直甫)

